

インタビュー「ソロとハーモニーの応答」

今回、ソリストとしてお迎えした松雪明氏から、尚美学園短期大学の同期でもある指揮者の永藺氏を交えて、楽器を始めた頃のこと、高校・大学時代の思い出、サクソフォンの魅力など、多岐にわたるお話を伺いました。 (聞き手：尾崎正峰)

《なぜサクソフォンだったのか?》

ーサクソフォンを始められたきっかけは、どんなものだったのでしょうか。

松雪：テレビから流れるトランペットの音に憧れて、吹いてみたいというのが最初でした。吹奏楽が盛んな中学校で、入部してみると自分と同じ思いの人が数多くいたため、希望の楽器を選ぶ事ができませんでした。木管で人気の高いフルートやクラリネットは全員女子でしたが、サクソフォンには男女の先輩がいたため、迷わずに決めました。

いざ始めてみると、最初の1ヶ月ぐらいまでは簡単に音は出ますし、指使いもやさしく安心して練習に取り組みましたが、それを過ぎると楽器の難しさがどんどんと迫ってきました。いわゆる才能があるタイプでは無い私にとって、上達するまでにはすごく時間がかかりました。中学校の3年間は、上級生から言われることや教則本に書かれていることを、ひたすらがむしゃらに練習しても芽が出ない、自分の思い描く音にはほど遠い、そんな状態でした。

ー吹奏楽の名門福岡工業大学附属高校（現福岡工業大学附属城東高校）に進学されようと思ったのはなぜでしょうか。

松雪：今まで経験した事のない新しい環境に身を置きたい、名門校ともなれば上手な人しかいないためビリから入って自分を成長させたい、変化していく自分を見てみたい、という気持ちが強かったのだと思います。それほどに、中学生の目からは、楽器が上手な高校生が、とても逞しく、堂々としてかつこよく見ええました。自分もああなりたいという気持ちの表れだと思います。

吹奏楽部と柔道部は「全国区」で有名な高校で、部員は全員、寮で生活を過ごさなければならなかったんですね。合宿という言葉を聞くと3泊4日とかを想像される方が多いと思いますが、私の場合は3年間でした(笑)。お盆と正月の合計で1週間程の帰省はありますが、それ以外は全て寮生活でした。吹奏楽部員は全員仕送りの金額も決められており、言葉通りに寝食を共にした仲間たちと暮らす中、コンクールやコンサートへかける熱い想いは誰よりもありました。高校生の年頃は興味が沢山あるものですが、そんな中、吹奏楽のみに集中すること、吹奏楽コンクール全国大会金賞という目標に向かってみんなが一つになる、そうした環境に自分がいた意味は非常に大きかったと思います。

ー音楽の道を目指そうと考えたのは、いつ頃で、どんな思いからだったのでしょうか。

松雪：夏休みというと合奏練習の真っ只中というのが普通なのですが、私の高校はほぼ毎日が自主練習で、エチュードとの格闘に明け暮れていた高校2年生の夏、頭の中で何かが閃き、一人で演奏することの楽しさに初めて目覚め、プロに指導して欲しくなり先生を探したところ、パリ音楽院を卒業後、日本に帰国された方が福岡にいらっしゃったため弟子入りしました。必ず週1回レッスンに来なさいと言われるサクソフォンのレッスンの他、ピアノやソルフェージュを一から教えていただきました。そして、自然と吹奏楽というよりも音楽を勉強したい気持ちが強くなりました。音楽の大学に行くという気持ちは正直余りありませんでしたが、クラシカルな表現やサウンドに興味がありましたので音楽大学で学ぶしかないなと思いました。

《「パタパタ」の音に込められた思い》

ー大学でのお二人の出会いというのは、どんな感じだったのでしょうか。

松雪：音楽大学は「自分以外のみんながライバル」という感じの所ですが、永菌さんとは何故か意気投合しました。常に一緒に過ごしていたわけではないですが、ファミレスで朝方まで語り明かしたことなど、今でも鮮明な記憶として残っています。

永菌：私は高校を卒業してすぐに吹奏楽の指導を始めて2年ほどしてから大学に進みました。プレイヤーとして行く道もあったのかもしれませんが、それよりも指導の方にウエイトを置くようになり、大学2年の時、私が指導していた高校の吹奏楽部の演奏会で彼にソリストとして来てもらったこともありました。

ー永菌さんから「夜、パタパタとキーを動かしている音が聞こえてくる」旨のエピソードを伺ったことがあります。学生時代、猛練習をされたようですね。

松雪：幼い時から楽器に取り組んでいる弦楽器やピアノの人と比べると、自分は10年スタートが遅れていると一人で勝手に焦っていて(笑)、楽器に1分でも長く触っていたいという思いからでした。リード楽器の場合、ピアノと違い長時間の練習ができません。集中力を切らさず練習できるのは1日4時間ぐらいだと思いますので、息を入れず(音を出さず)に指を動かす練習で夜中にパタパタとキーを押さえていました。それは、人が遊びに来ていても気にせずに(笑)。

永菌：でも、パタパタと音がするのは楽器には良くないんですね(笑)。

松雪：そうなんです(笑)。あの頃は、無我夢中に練習さえすればできないことは何もないという、妙な自尊心だけがありました。

《“七変化”の魅力》

一サクソフォンのことをよく知らない弦楽器のメンバーも多いと思われませんが、この楽器の特徴や魅力という、どのようなものでしょうか。

松雪：正統的なクラシカル・サクソフォンの音色はどんな音ですか？という究極の質問を受けることが多いのですが、あまりにも音色の種類がありすぎて答えられません。理由としては、奏者によってまったく異なるイメージがある事がこの楽器の最大の魅力ではないかと思っています。また、中学生や高校生でもきちんと実力を身に付ければ、美しい音色や豊かな音色で説得力あるテクニック、表現力を発揮できる楽器なんですよ。

永菌：レヴェルの面から見れば楽器をコントロールする技術が演奏の善し悪しを左右しますね。また、歴史が浅い楽器(注：1840年代初頭にベルギーの楽器製作者アドルフ・サククスによって考案)、言い換えれば、ヴァイオリンなどと比べれば「未完成」の楽器で、その分、発展する余地も大きいともいえるのでしょうか。

松雪：そうですね。ジャズはもちろんオーケストラのレパートリーでも登場しますし、いろいろなジャンルで必要とされることは、この楽器にとって未来があるということでしょう。



たとえば、アルバン・ベルクのヴァイオリン協奏曲(注：ベルクの作品中もっとも有名で、「ある天使の思い出に」の献辞がある)という重要な作品にアルト・サクソフォンが登場します。3番クラリネットとの持ち替えの指示ですが、ソロ・ヴァイオリンとの絡みがかかなり難しく、スコアをしっかりと勉強しないとリハーサルについて行けません。また、音色についてですが、私の場合はクラリネットに「寄せる」感じの部分もあればヴィヴラートをかけたサクソフォン本来の音色を出すところもあります。時にはヴァイオリンのような響きを取り入れたり。これが自分の音だと押し通す事はまずありません。多様なレパートリーに対して様々な音色を出せることが求められ、それができるとオーケストラの中に私が座っている意味があると常々感じています。何より七変化する事が楽しくてたまりません。

《ソロへの思いの転変》

松雪：ソリストとして演奏することより、みんなの中に入ってユニゾン奏でる、ハーモニーの中にいることの方が幸せを感じていました。ただ、ある時期から意識が変わってきて、ソロの方が楽しくてワクワクする気持ちが勝ってきました。きっかけのひとつは永菌さんですね。音大での出会いから今年で 37 年目。久しぶりのある日のこと、永菌さんが指揮者をされている大宮吹奏楽団にソリストとして呼んでいただくようになりました。最初の頃は恥ずかしいなという気持ちがあったのですが、彼となら一緒にやってみると楽しいと思わせてくれたおかげです。

永菌：最近では、大宮吹奏楽団の第 30 回記念定期演奏会(2019)でクレストン「サクソフォン協奏曲」のソリストとして演奏してもらいました。

一私も会場で聴いていましたが、「ぜひ当団でもソロを」と即座に思いました。

《クアルテットとオーケストラ》

永菌：ソリストとしてお招きする前、久しぶりに「再会」したのは、有名なサクソフォン四重奏団「アルモ・サクソフォン・クアルテット(HSQ)」の結成 10 年の節目(1992年)に出た初アルバム CD「四重奏の日々パート I」のジャケットでした。話題になっていたので購入すると「すかした」感じで(笑)写っているのを見て、活躍しているんだなと思いました。

松雪：四重奏に興味があって、自分が目標としている HSQ のメンバーの一人が辞められた事からオーディションが行われました。東京藝術大学と国立音楽大学出身のメンバー構成のグループでしたので、全く受かる気はしませんでした。意外にも新メンバーとなりました。HSQ のメンバーとなって、レコーディングの他、公演で全国各地を回りました。この活動のおかげもあり日本フィルハーモニーや神奈川県フィルハーモニーなどから、室内楽をやっている奏者がいいということでエキストラとしてたくさんのステージに乗せていただきました。

そうした経験を積む中で 21 年前から読売日本交響楽団に定期的に行くことになりましたが、読響のプログラムのレパートリーは幅広く、フランス系、ロシア系のみならずドイツ系、アメリカ系の作曲家の作品にもサクソフォンが度々登場します。そうした時に最も心がけている事は、隣で吹かれるクラリネットのみな



さんが「どんな音色を出してほしいのか」です。また、指揮者の方々は皆さんオーラがとても強く、音色のイメージや表現の仕方を瞬時に察知し対応する事を求められます。緊張の連続で大変な仕事ですが、世界で活躍する優れた指揮者から「心を揺さぶる豊かな音楽」を追求する事の大切さを教えられ、それは私の財産となりました。

《それぞれの立ち位置が織りなすアンサンブル》

—当団の他、いくつもの吹奏楽団や大学のオーケストラのご指導もされていますが、そこでのポイントとして考えられていることは何でしょうか。

松雪：シンプルな考えとして、リードを執る人の役割、それに合わせて付いていく人の役割をそれぞれ認識していくことだと思います。それは、吹奏楽でもオーケストラでも、演奏技術のレベルとかには関係なくアンサンブルの基本的な考え方からです。木管楽器は発音する部分の形状がそれぞれ違い、タイミングがズレやすい為、特に意識させます。木管、金管、打楽器、弦楽器のそれぞれの立ち位置を理解しながら限られた時間の中、1つの方向性を見つけて行けるよう指導に当たっています。

—最後に、今日演奏するグラスノフの協奏曲について、一言、お願いします。

松雪：この曲はピアノ伴奏で演奏することが多く、今回のようなオーケストラとの共演は誰より自分自身が一番楽しみです。私の中では、弦楽合奏の曲にたまたまアルト・サクソフォンが入っているという考え方でいます。コンサートマスターの尾崎さんと共にリードをしながら、この作品の多彩なサウンド、豊かな叙情性、大団円のラストへ向けての音楽を存分に表現したいと思います。どうぞお楽しみに。

永菌：曲も難しくソリストとオケの板挟みで身も細る思いですが頑張ります。

—オケとしても、少しでもストレスを減らして、良い演奏にすべく頑張ります。

